春日小だより

令和７年１月３１日
練馬区立春日小学校
校　長　後藤　京子
学校通信　２月号

命の誕生という奇跡

副校長　市村　大

２月は、個人的に大変印象深い月です。１つは、今から３０年以上前、小学６年生で挑んだ中学受験の思い出。今では多くの６年生がチャレンジしていますが、当時はそこまで盛んではありませんでした。１月下旬に千葉県の受験に挑み、２月１日～３日に都内私立の学校に挑むのが主流だったと思います。よりによって私の受験時は、２月１日に記録的な大雪が降って交通が大幅に乱れました。会場に着くのも必死で、息も絶え絶えに挑みました。そして、なんと翌２日は朝に震度５を超える地震があり、前日の雪と相まってこちらも大混乱。２日連続でへとへとになりながら受験しました。忘れようと思っても忘れられない２日間です。

もう１つは、私の誕生月なのです。今となっては、年々衰えを感じる月となってしまいましたが…。やはり誕生日は、何歳になっても特別な感情があります。子供の頃は、純粋にお祝いしてもらえる喜びが強く、プレゼントを楽しみにしていました。ある程度年齢を重ねると、自分がこの世に生まれた奇跡や、両親への感謝を感じるようになりました。特に、そのきっかけとなったことが、小学校の授業でありました。

今では実施することが難しいですが、当時は自分の出生のことを調べる授業がありました。何年生の頃のことかは明確ではないのですが、自分の出生について両親に話を聞いて、自分の母子手帳を見てくるように言われたのです。それまでも度々、自分が生まれたときのことは聞いていましたが、改めて調べてみると、自分が生きていることが奇跡だと感じたのです。

母子手帳を開いてみると、目に飛び込んできたのは、私が死にかけていたことを表す言葉。実は私、帝王切開で生まれた子です。予定日になっても生まれず、調べてみたところ、産道で詰まっていることが確認されたようです。医者の判断で緊急帝王切開となり、取り出した時にはなかなか泣かなくてかなり焦ったようです。父親曰く「医者がお前を逆さづりにして、思いっきりひっぱたいていた」…本当に緊迫した場面だったのですね。ただ、その後で父親が言ったセリフが、「頭が細長く尖っていて、本当に戻るのか不安だった」…それ？！確かに、生まれるときだけ頭蓋骨がずれて細長くなりますけど、生き死にの瀬戸際にいる息子を見て「頭が尖っている」って、子供ながらに違った意味での衝撃を受けました。

でも、それを笑い話にできるのも、今私が元気だからです。客観的に見て、私は誕生と同時に死んでもおかしくなかった。気軽な気持ちでインタビューをしましたが、その結果、今でも強く印象に残る思い出となり、命の誕生について考えるきっかけとなりました。

毎日、たくさんの子供たちを見ていますが、まずは元気に過ごしてくれていることに喜びを感じます。全員、命の誕生という奇跡を超えてここにいるのです。せっかく奇跡を乗り越えたのですから、与えられた命を精一杯謳歌してほしい、そのことを切に願います。

ちなみに、我が息子が生まれたときもかなり壮絶で、その場面のことも一生忘れないでしょう。そして、生まれてきた息子を見て「頭が尖っているかも…」と思ったことは、本人と母親には言わないようにしています。